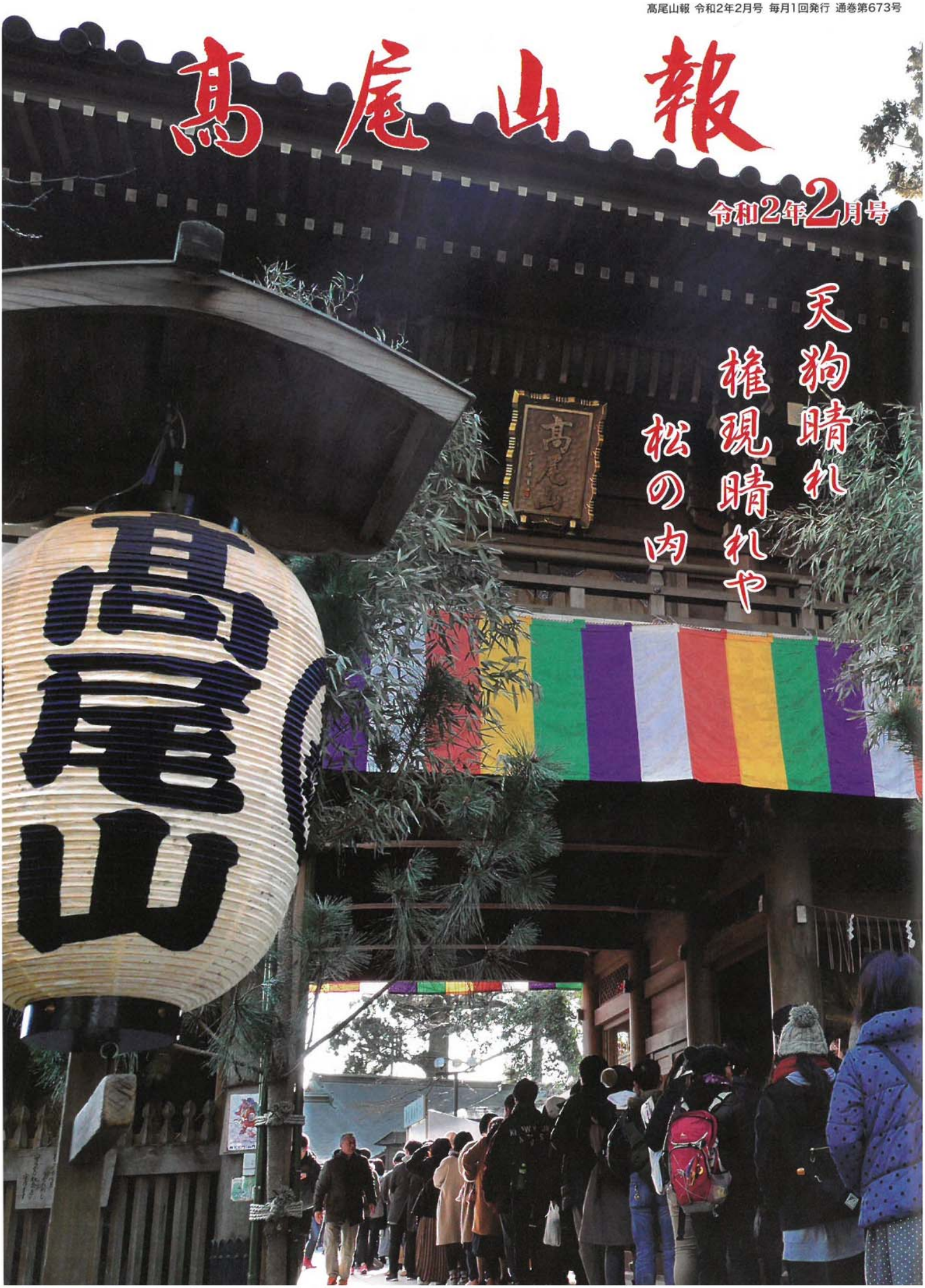
高尾山報 令和2年2月号 毎月1回発行 通巻第673号

高尾山報

令和2年2月号

天狗晴れ
権現晴れや
松の内



法の水茎 (92)

大正大学講師　髙橋秀城

「鬼は外、福は内」

新たな春を前にして、大きな掛け声が響き渡ります。二月三日の節分は、冬の最後を飾る日。皆さまの心の中には、どのような思いが芽生えていらっしゃるでしょうか。

年ごとに　人はやらへど
目に見えぬ　心の鬼は
ゆく方もなし

（異本『賀茂保憲女集』）

（毎年、鬼を装った人は追い払うけれど、目に見えない心の中の鬼はどこへも追いやる術がない）

日本では古くから、季節の変わり目には邪気（鬼）が生じると考えられてきました。鬼をめがけて豆を撒く風習は、すでに室町時代には行われていたそうです。諸説ありますが、「豆」という言葉の響きは、「魔が姿を消す」という仏教語の「魔滅」にも通じることから、鬼に豆を当てることによって災いを取り除き、これから一年の無病息災を願ったと伝えられています。

ただ、冒頭の「年ごとに」の歌にあるように、目に見える鬼はともかく、見ることのできない「心の鬼」は、どのように退治したら良いのでしょう。

「心」と「鬼」を含む四字熟語に「疑心暗鬼」（「疑心暗鬼を生ず」の略）があります。「心に疑いの気持ちがあると、でもないことまで恐ろしく思ったり、疑わしく感じてしまうこと」の喩えです。日常生活でふとよぎる不安や恐れは、もしかすると疑いの心など、心の奥底に隠れている「邪な心」（暗鬼）の仕業だったのでしょうか。

季節はこれから、本格的な春へと向かっていきます。野辺の草花の蕾も、日一日とほころんでくるでしょう。もしかすると、私たちが気づかないだけで、一瞬一瞬違った表情を見せているのかもしれません。

これまで述べてきたように、仏教では「全てのものが移り変わること」を「無常」と言い、この「一瞬」にも生まれたり滅んだりを繰り返していること」を「念々無常」（刹那無常）と呼びます。

例えば、空の稲妻（稲光）は、肉眼ではパッと瞬時に光っているように見えます。しかし、特殊カメラで撮影してみると、雲と地面の双方から電光が伸びているのが分かります。さらに、一瞬に見える落雷の間には、いくつかの雷撃が約〇・〇五秒の間隔で繰り返される場合もあるそうです。

こう思えば、自然の移ろいなどは目にも留まらぬ早さで変化しているのでしょう。それは見えるものだけではく、覗き込むことのできない自分の心の中も同様と思われます。短い間にあらゆるものが生まれては消え、消えては生まれ、時には不安や恐れの感情も顔を出します。

短い人生をどのように生きるかを説く話に、次のようなものがあります。

都に名高い僧がいました。仏事に招かれて多くの布施をもらって帰る途中のこと。待ち伏せしていた強盗たちに、全てを奪われてしまいました。

僧は、一時の利益のために大罪を犯した強盗を嘆かわしく思い、我が身が災難に遭っていることも忘れ、ただ強盗たちの来世での苦しみを思って悲しみました。そして、「どうして電光朝露のように儚い身のために、無数の苦しみの原因を作るのか」と澄んだ声でお経を唱えました。強盗は、僧の言葉の意味は分かりませんでしたが、何となく貴く感じられて、気づけば構えていた矢をドロしていました。

節分会では一年の無病息災を願い豆をまく

僧はさらに、「人の一生は夢や電光、朝露のようなもの。百年の寿命も一夜の眠りと同じ。このような僅かな現世を生きるために、そなたたちは地獄に堕ちるような悪行をしているのだ。せっかく人の身と生まれて仏法に巡りあったのに」と泣きながら語ると、強盗も思わず涙して立ち去っていきました。

さて次の日のこと。強盗の一人が僧のもとにやって来ました。「昨夜の御説法に発心（信仰心を起こすこと）して、強盗は皆入道（修行の身）となりました」と語ると、三十人ほどの切った髪（髪を束ねたもの）を置いていったのでした。

（『沙石集』）

僧の説法は、しっかりと強盗の心に伝わりました。これまで誰も教えてくれなかった人生の短さや、短いからこそなすべきことを気づかせてくれたのでしょう。僧の揺らぐことのない慈悲心（相手に楽しみを与え、相手の苦しみを取り除く心）が、「心の鬼」を追い払ったものと考えます。

石火の光の中
一刹那
あはれあだなる
浮世かな

（『太平記』）

（人の寿命は、石火の光のように一瞬のもの。何と儚い世の中か）

「心の鬼」には「取越し苦労」も含まれます。不確かな将来を考え、徒に心配をするよりも、今この瞬間に目を向けてみてはいかがでしょうか。この春を機会に、さまざまな心の鬼を、その都度しっかりと取り払っておきたいものです。

（栃木北部教区普濟寺）

令和初の後七日御修法

一月八日～十四日

教王護国寺（東寺）灌頂院において、真言宗最高の儀式であります令和初の後七日御修法が一月八日より十四日まで七日間執り行われました。

御修法は開祖・弘法大師が承和元年（八三四）十二月に奏請して、承和二年（八三五）正月に宮中で始められ、現在では東寺に移し、真言宗各派の総本山・大本山から御山主（管長）や、選ばれた高僧の方によって国家安穏、五穀豊穣、世界平和を祈念されます。

今回、大阿闍梨を真言宗御室派・総本山仁和寺門跡・瀬川大秀大僧正猊下が務め、息災護摩壇、増益護摩壇、五大尊壇、十二天壇、聖天壇、神供壇を設け、真言宗各山の高僧方十五名が配役を司り、高尾山法類寺院の放光寺長老（山梨）清雲俊元大僧正が、十二天供を担いました。

令和初の慶びの年でもあり、沿道には大勢の参詣者が、麗しき朱傘を差しかけられた高僧たちに手を合わせていました。

朱傘を差しかけられて
歩みを進める清雲僧正

院内散歩 36

～薬王院の展示物～

チェンソーアート『子』
作・城所ケイジ

令和二年 初詣 飯縄様への篤き祈り

名取会長（左から3人目）と甲信地区参拝団本部の皆様

令和二年庚子の新春、晴天に恵まれた高尾山には、全国から大勢の御信徒の皆様が訪れ、賑わいを見せておりました。

新年を迎えた大本堂では、世界平和、国土安穏、東日本大震災早期復興、家内安全、身体健全、身上安全、心願成就、その他諸願成就を祈り、新春特別開帳大護摩供が厳修されました。

老舗駅弁会社である㈱丸政の、**名取政仁会長**が甲信地区初詣参拝団の一員として初詣に来山されました。

元々は中央本線の構内で営業を行っている駅弁会社やお土産物店などの複数の企業が主体となって乗客を誘致し、団体専用列車を運用して高尾山初詣を続けておりましたが、中央本線沿線ではそうした企業は少なくなり、今では㈱丸政が主体となっております。

現在では甲信地区初詣参拝団は列車ではなく、バスを利用して高尾山へ訪れる団体でありますが、列車時代から数えると、本年で五十周年を迎えられました。

㈱丸政は中央本線と小海線が乗り入れる小淵沢駅で大正七年に創業され、「高原野菜とカツの弁当」や「元気甲斐弁当」などで知られており、昨年に創業百周年を迎えられました。

名取様によりますと、「自分の足で元気に登って参拝すると、自信がつき一年間のやる気が違ってくる。」とお話しされ、「これからも新たな時代に向けて、家業である駅弁や駅そばの文化を継承してゆきたい。」と語っておられました。

群馬県伊勢崎市からは、**谷川希伊子様**御一行が参拝に訪れました。

谷川様は四十年近く初詣をされているそうで、以前は観光会社の初詣ツアーに参加してのお参りでしたが、観光会社の廃業後には、家族での参拝を続けられており、今ではお孫さんと一緒にお越しになっております。

お話を伺いますと、高尾山をお参りして印象深いことは、三十年ほど前に交通事故に巻き込まれたことがあり、翌年の正月に本堂で御護摩修行に参加されている時、「事故の後遺症で違和感の有った場所がスッと良くなったような気がして、この怪我が治ったらこんな感じになるのだろうな」と思った体験があるそうです。

また、ある年の御護摩修行の際に、合掌している手のひらの中に光が入ったように感じたことがあり、その一年は幸運に恵まれた年であったとも語っておられました。

いつもは精進料理をお召し上がり頂いておりますが、本年は残念ながら所用のためすぐお帰りになりました。精進料理は来年の初詣の際の楽しみにするとお話しされ、下山されました。

谷川希伊子様（右）御一行

東京都杉並区から西荻北高尾講の皆様が団参に訪れました。

西荻北高尾講と高尾山の御縁は、現在の講元の**城戸陽子様**のお母様である、先代講元の城戸フク様が病気を患ったことをきっかけとして高尾山にお参りするようになって以来です。

陽子様は現在でも初詣だけではなく、火渡り祭をはじめとして、年間を通して参拝されているそうです。

講中の皆様にお話を伺っておりましたところ、ある講員の方が昭和五十年頃の写真を持って登山されておりました。拝見させていただきますと、フク様と共に初詣に訪れた際に撮影されたものでした。

その写真は楽しそうに談笑されている様子で、雪が降る中、下駄を履いて登山されていることが分かります。

昭和50年頃の初詣の様子
右が先代講元の城戸フク様

城戸陽子様（前列左から2人目）と講員の皆様

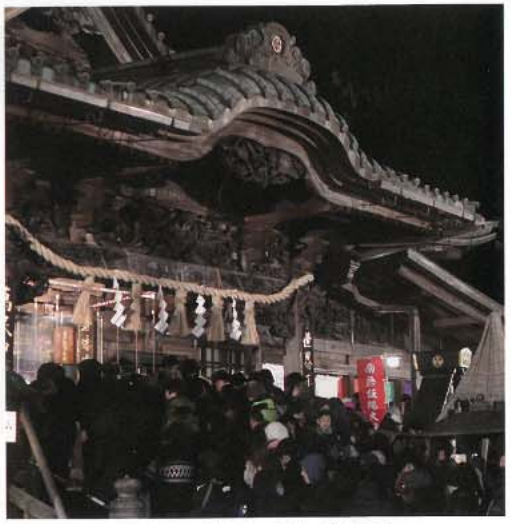
幸多き一年でありますように…

新春に祈る　高尾山初詣

令和二年　庚子（かのえね）

山頂で行われた迎光祭では、訪れた大勢の人々と共に初日の出を拝む

大本堂で一年の幸福を祈る



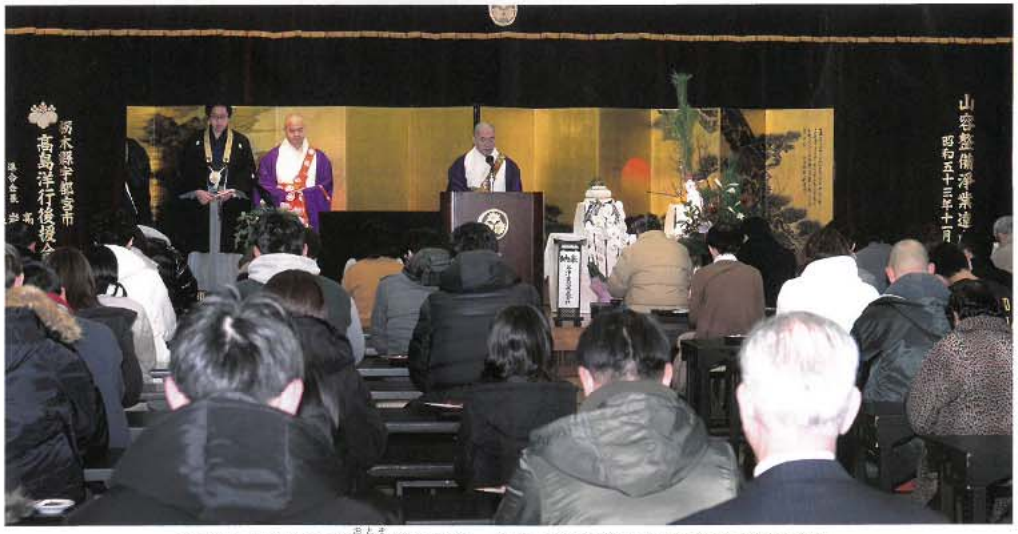
二年参りに訪れた大勢の参拝者

山中迓晶（ふじえさ）さんによる飯縄権現堂での奉納舞

新春特別開帳大護摩供が厳修される

私のおみくじはどういう意味？

広島県から初詣に来られた中島様御夫妻



有喜閣大広間でお屠蘇（とそ）膳を頂き、新年のご挨拶を受ける御信徒の皆様

高尾山年代記 ②

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

一世　俊源2　高尾山中興の縁起（下）

高尾山一世俊源の事跡を検証する同時代の史料は発見されていない。中興にまつわる具体的な事跡は三七五年の後となる寛延三年（一七五〇）に作成されたという文面に頼らざるを得ない。しかし、寺の縁起としてどのような来歴を掲げたのかについては、当時の人々の考え方、価値観を知る上で有用なことであろう。

飯縄大権現の示現

京醍醐寺から下向した僧俊源は高尾山中を修行の地と定めた。ある日、十万枚護摩を修した後、疲れを感じて寝入ってしまった。すると、その夢枕に人面にしてくちばしを持ち、白狐にまたがり、右手には剣、左手には羂索を捧げ、翼の生えた背には火炎を背負う異形の姿を見る。異形の者は俊源に告げた。

余は阿遮羅明王たり。叔世辟多し。諸魔まことに繁くいたずらになす。

「阿遮羅」＝アーシャラとは梵語で不動明王のことを言う。「叔世」とは仏法の衰退期である「末世」のこと。「辟」とは「邪」を意味する。すなわち、末世には邪悪なことがはびこり、悪魔の跳梁が繁く、させるがままとなっているとする。

余は震雷して馮しまさにこれを降伏す。故にこの奇変を現ず。これを飯縄神と言う。汝まさに禋祀すべし。

「憑」には巫女に神が憑依するというような意味とともに、「怒り」という意味がある。「震雷して」という形容からすると後者の意味がふさわしいだろう。強い怒りを発し悪魔を降伏するため、この奇変の姿で示現しているという。つまり、本来の不動明王のそれではない、その姿を「飯縄神（飯縄権現）」であるとしている。末世の混迷期ゆえに威力ある神の出現が必要という考え方だが、鳥、狐、蛇というのは山中で目にする鳥獣である。恐らく、修験者を含む当時の人々はそれらを目にして神の化身あるいは神使として理解したのであろう。山岳霊場にふさわしい造型と言える。

さて、この不動明王が飯縄権現に姿を変えるということは「本地垂迹説」という一〇世紀頃に現れる神仏習合の教説に因るもので、「権現」という神号はその典型である。他にも金剛蔵王権現、日吉山王権現、白山妙理権現などの例がある。「権」とは「代わりの」あるいは「一時的な」という意味があり、すなわち、仮の姿で仏（本地）が現れている（垂迹）という意味になる。神と仏が一体という教説は、明治新政府による神祇道再興によって否定された。

飯縄大権現の祭祀

「禋祀」とは潔斎して祀るという意味。霊夢によって俊源が飯縄権現を祀る宣託を受けたということになる。

御前立御本尊飯縄大権現御影

しばらくして自らその像を刻せんと欲す。思いて未だ得ず。一夕、異人来りて曰く。我、これをよくす。

俊源は夢に見た飯縄権現の姿を彫刻しようと思い立つが、それは容易なことではなかった。ところが、ある夕べ異人がやって来て、自分にはそれができると言った。「異人」を今日の意味での外国人とすべきか、面持ちの常人とは違った特異な存在を匂わす人物という意味にでも取っておくべきだろうか。

すなわち山西の窮谷巌石の間において廬し、人のこれを伺うを許さず。

山の西方にある峡谷の岩の間に、「廬」とは「庵」に同じだが、仮屋に住まうという意味。異人は像を刻む姿を決して他人に見せなかったとする。

七日、始めて成す。その像すなわち夢みしところの如し。威霊赫々。見る者毛起し。正視を得ず。

一週間の後、像は完成し、それは俊源が夢に見た通りだったと言う。強烈な霊気は、見る者は恐れて身の毛がよだち、とても正視していられない程だったと言う。

異人また去る所を知らず。すなわち祠を建ててここに安んず。

異人はいつの間にか姿を消し、どこに行ったかわからない。異人の来訪は現実のことなのか定かでないような神秘的な経験というニュアンスを醸す。そして、異人が刻んだ飯縄権現像は祠を建てて祭祀された。

土人、俊源の祈り祓う所により、祉を得ざる者なし。

「土人」とはその土地の人を意味し、江戸時代には地誌などで通常用いられた用語である。「祉」とは「さいわい」と読み、文字通り幸福の意味。近隣の住人が俊源の祈祷により利益を得ない者はなかったという。

異人の廬、その跡なお存す。今、炊谷と言うなり。

異人が住居した跡は今なお残り、そこを「炊谷」と呼ぶ。炊谷の位置は縁起よりは半世紀程後となるが、『新編武蔵風土記稿』（一八二二）「多磨郡之部」成立）に「寺の裏門より西へ二町余をへだてて、左の傍にあり」と記される。現在、炊谷の名を残す場所として、「かしき谷園地」がある。薬王院の大本坊を通り抜けてしばらく歩くと三号路との交差点に至る。谷側に降りてゆくと、ベンチの置かれた少しく開けた広場がある。今日となっては異人が籠ったという「窮谷巌石の間」がどこかは全く定かではないが、人通りも少なく森閑と静まり返った谷地において、高尾山中興の逸話に思いを馳せるのも感慨深い。

俊源の寂年は永和四年（一三七八）十月四日のこととされる。これは天保四年（一八三三）の「由緒書」に記された年次だが、もとよりその根拠ははっきりしない。寛延の縁起が俊源の来山と伝える年からわずかに三年。この由緒書では中興を永和二年とするので、その二年後である。後世の創作としても何故その年次が採用されたのだろうか。大事を成し遂げ余命を約めるという逸話には事欠かない。恐らくそのような解釈なのだろう。

× ×

冒頭に記したように高尾山中興の状況については後世の記録に拠るしかない。高尾山薬王院の歴史を探り得る同時代の史料は弘治三年（一五五七）の九世源智印信（秘法伝授の証書）や永禄三年（一五六〇）の北条氏康寺領寄進状を待たねばならない。

しかし、これはそれ以前に高尾山薬王院が存在しなかったということを意味するわけではない。そして、前号に取り上げた醍醐寺俊盛から俊源への相承が明徳四年（一三九三）の血脈に記されていたという一文は、頼りなげな手懸りながら全く無視することもできない。俊盛の年齢は貞治六年（一三六七）当時四六歳と判明している。このことから、当面は高尾山の中興を二四世紀後半と受け取って、二世源廣以降の時代の様相と八王子近辺の歴史の推移について解き起こしてみたい。

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えます。寛延の高尾山縁起の原文は漢文ですが、読み下して表記も読みやすく改めています。

《参考文献》関口恒雄「二、寺歴・住職関係」（『高尾山薬王院文書』第二巻　法政大学、一九八九「解説」）

観音菩薩の宗教 ㉖

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

二十一ターラー菩薩を讃える経典

前回と前々回にわたり、ターラナータが著した『黄金の数珠』の内容を見た。そこにはターラー菩薩が救う十六の恐怖がエピソードとともに記されていた。ターラナータはチベット仏教の大学者であるとともに、その魂がモンゴル最初の活仏ザナバザルに転生したと信じられている。そのため、ザナバザルが弘めたターラー信仰の内容を知るには、まずターラナータの思想を知る必要がある。今回は、両者がともに読誦したであろう、チベット・モンゴルでもっとも重要なターラー関連文献である『二十一ターラーへの讃』（以下、『讃』と略記）を考察してみたい。

七世紀の前半にインドを訪れた三蔵法師・玄奘は、摩掲陀國（Magadha）で観音像とともに多羅菩薩像が造立されていたと『大唐西域記』第八巻に記している。それによれば、この時代のインドですでにターラー信仰があったことが証明される。観音信仰の深まりに伴いターラー信仰は弘まり、密教の興隆とともに二十一ターラーの思想が生まれた。こうしたなかで、それぞれのターラーの功徳を二十一の韻文で讃える『讃』が成立したのであろう。ネパールで発見された写本や、チベット語訳中に見られるランツァ文字というインド系の文字の記述により、サンスクリット語の『讃』も伝存しており、『讃』がインド起源であることが知られている。しかしターラー信仰にしても『讃』にしても、インド以上に熱心な弘まりを見せたのは、チベット仏教圏である。

チベット語訳の『讃』は、チベットやモンゴルの寺院で朝夕の法要で読誦されてきた。僧侶のみならず、在家の子供たちも幼い頃より『讃』を暗記していて、公私さまざまな機会に唱えている。アメリカの仏教学者バイヤーの報告によれば、東チベットのカムでは、すべての人が『讃』の全文を知っていて、朝夕低い声で唱えているという。例えば、冬の移動の際にオオカミから身を守るときや、朝ターラーにミルクをお供えするときなどに唱えられる。この『讃』にはオーム・ターレー・トゥッターレー・トゥレー・スヴァーハー（Oṃ tāre tuttāre ture svāhā）という真言が説かれていて、これは観音菩薩の真言オーム・マニ・パドメー・フーム（金岡秀郎「観音菩薩の宗教」②、⑩参照）に次いで人気のある真言とされている。この真言を唱えると、ターラーはその声を聴くやいなや救いの手を差し伸べると信ぜられており、ダライ・ラマ一世ゲンドゥンドゥプ（dGe 'dun 'grub 一三九一～一四七四）は、「このマントラ（真言）を唱えれば頭を切り落とされても生き続け、身体の肉がばらばらに切り裂かれても死なない」と述べている（Beyer. The Cult of Tarā. Magic and Ritual in Tibet. University of California Press.1978）。

モンゴル人の仏教徒は仏塔（ストゥーパ）や神聖なる柱を右遶（時計回りに廻ること）しながら陀羅尼を唱えて祈願する。ウランバートルのガンダン寺にて

日本では隆盛を見なかったターラー信仰であるため、これまで日本の研究者はターラーにさほど注目してこなかった。他方、欧米のチベット研究者はサンスクリット語やチベット語の『讃』をたびたび研究、英訳してきた。古くは一八九五年にイギリスのチベット学者ワッデルが『讃』の英訳をし、今世紀にいたっても複数の英訳が出ていることからも、その注目度の高さが知られよう。その一方、『讃』の日本語訳はまだ出ていない。

モンゴルにおいても『讃』が人気を博したことは、複数のモンゴル語訳があることから明らかである。モンゴル語訳の仏典は、十六世紀に活躍した大翻訳家シレート・グーシらの努力によって完成していくが、それ以前の翻訳は数が少ないながら思想史上は貴重なものが多い。ことにモンゴル帝国の元朝期になされたモンゴル語訳仏典は、その後のモンゴル仏教の基礎となったものが少なくない。例えば、最初のモンゴル語訳仏典である『ボーディチャリヤー・アヴァターラ（入菩提行論）』は、中観思想すなわち空の哲学とその実践である六波羅蜜を弘めることになったし、次いで現れた『金光明経』は護国仏教や四天王信仰の根拠となった。これらの訳出は、いずれも十四世紀初頭から中ごろにかけてチョイジオドセルやシェーラブセンゲといった最初期の翻訳家によってなされたものである。

仏教導入の最初期が幼く未熟であるとは限らないのは、日本の飛鳥時代の仏教にも見ることができる。仏教が伝わってまもなく聖徳太子は三経義疏を著したとされるが、そこに選ばれた三経は、その後の日本仏教の性格を決定するのに大きな力を発揮した。『法華経』はブッダとその教えの永遠性や観音信仰、『維摩経』は在家主義の仏教や空の思想、『勝鬘経』は女人成仏など、いずれの思想も日本仏教の基礎となった。三経義疏については聖徳太子の真撰、偽撰の議論があるにせよ、飛鳥仏教が次代の土台となったことは疑いえない。

モンゴルの初期仏教にも同様の働きがあった。元朝期のモンゴル仏教は宮廷での信仰に限定的であったとはいえ、質的にはその後の思想界を支える基礎となった。『讃』が初めてモンゴル語に翻訳されたのも、元朝期であった。現存する最古の『讃』のモンゴル語訳は、南モンゴル（現・中国内蒙古自治区）にあるアルジャイ（Aǰiai）石窟の壁面に書かれた『二十一ダラ母の讃』と宣徳六（一四三一）年に明の北京で木版印行された『宝なるタラの二十一の讃』と題されたものである。これらは訳者不明であるが、大元ウルスすなわちモンゴル帝国の元朝における「諸国の言語に通じた安蔵のような人物」によってチベット語からモンゴル語訳されたと推測されている（楊海英『モンゴルのアルジャイ石窟―その興亡の歴史と出土文書』風響社、二〇〇八年）。安蔵は十三世紀に活躍した訳家で、異説はあるものの、チベット語とともにウイグル語や漢語を解したと推測する研究者もいる。彼はチベット語の『讃』から『聖救度佛母二十一種禮讃経』を漢訳した人物である。

この二種のモンゴル語訳は、清代に整理され印行された北京版のモンゴル語大蔵経に収録されたものとは相違することが明らかにされている。アルジャイ石窟のタイトルにあるダラとはターラーのモンゴル語転訛で、母なるターラーすなわち仏母から諸仏諸菩薩が生まれることを示すものである。その名称からも、モンゴルにおいてターラーはすべての尊格の母として尊崇されたことがわかる。

モンゴルにおいて『讃』は他の陀羅尼などと並んで僧俗問わず広く愛唱された。モンゴル語訳のタイトルに見えるマグタール（maǰtaǰal）は「讃えること」「讃えることば」を表し、チベット語のトゥー・パ（bstod pa）から翻訳された。この語はさらにサンスクリット語のストートゥラ（stotra）に遡る。いずれも「讃歎文」を意味し、英語では praise と訳される。日本の真言宗・天台宗などで音律豊かな声明で唱えられる『四智梵語讃』などもストートゥラに属し、仏菩薩や、その智慧などを讃えるときに用いられる。チベットやモンゴルで『讃』が広く愛唱されたことは、ターラー菩薩およびその権化が篤く尊崇されたことの証しであった。

高尾山　季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
魚上氷
「うおこおりをいずる」
二月十四日～二月十八日頃

この頃には水面の氷が解け始める時期で、魚の姿が見えてくるという意味です。

まだまだ気温は低いのですが、水辺では生き物たちが活発になり、地上よりも一足早く春が訪れます。

今月の風物詩
ワカサギ釣り

ワカサギは様々な環境に適応でき、食用魚であることから、各地の湖に生息しております。

実は冬だけでなく秋頃から漁が解禁されますが、やはりワカサギ釣りといえば氷の張った湖に穴を空けて釣る「氷上の穴釣り」が有名でしょう。

■健康登山者投稿作品■
季節の絵手紙「今年も頑張ります」
八王子市　栃谷玲子　様

一歩一歩煩悩滅除
百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

八十五段　愚痴話をするな

人間誰しも愚痴をこぼしたくなる時はあります。しかし、聞いている人にとって気分が悪くなるものです。愚痴をこぼさないためには、自分に自信を持ち、心を広く持ち、常に笑顔で生活することが大切なことです。

◎健康登山の皆様へ
高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

健康第一

シャンソン歌手　友納あけみ

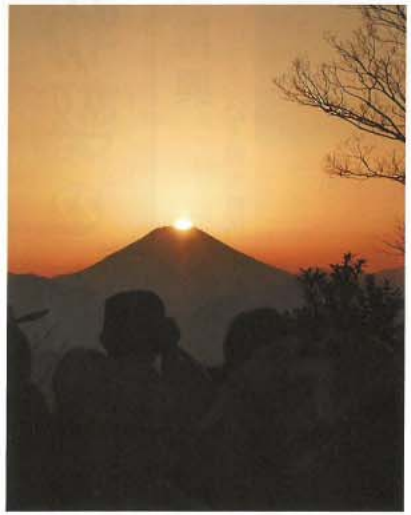
令和二年のお正月、皆様如何お過ごしでしたか？私は、この地、桜上水に引っ越して初めてのお正月！晴天にも恵まれ、窓越しに朝は真っ白な富士山、夕暮れは茜色に染まったシルエットの富士山を眺めながら、穏やかな幕開けを迎えました。除夜の鐘を聞いて、すごく久しぶりに冷たい風の中、ムクムクに着込んで近くの神社に初詣！来年の「健康」をひたすら願ってきました。

実は昨年は後半、体調を崩し大騒ぎ！ちょっと一息と気が緩んだ途端にまずは風邪を引き、拗らせ、声帯を傷めたことから始まり身体のバランスが崩れたのか？風邪もなかなか抜けず、自分でも自分の身体がわからない状況！声帯もなかなか治らず、もう治るか？治るか？と思っているうちに結局二ヶ月！仕事もプライベートもキャンセルや変更ばかりを繰り返し、皆様に本当にご迷惑をかけてしまいました。

気持ちばかりが焦り、情けないやら、申し訳ないやら…本当に歯痒い日々でした。クリスマスの仕事を何とかこなして、漸くこの年末年始にゆっくり休みをとったのもあり、やっと快復した次第です。

本当に健康でないと何もできない！当たり前に思っている喋ること、歌うこと！歩くこと、走ること！食べること！眠ること！等、全ては恵まれていることなのだと！改めて気がつかされました。

恵まれたことだから、感謝して大切にしないといけないですよね。今年の抱負は迷いなく「健康第一」。食生活やトレーニングを見直して、積極的に身体を大切に鍛え直すつもりです。


高尾山頂より望むダイヤモンド富士

折り折りの記(126)
豆撒きの声木霊する高尾山
波多野　重雄

立春の前夜二月三日、高尾山薬王院はこの日邪鬼を追い払い、新しい春を迎えるという心から追儺が行われる。節分会では、高尾山薬王院に毎年お相撲さんの玉鷲関や市の観光大使の北山たけしさん、市の伝統の芸妓衆や市民の善男善女等多数参加し袴姿で豆を撒くのは圧巻である。

又、今年の大河ドラマ明智光秀の「麒麟がくる」が始まった。天下人の信長に宿老は強制国替等に怯える一方、秀吉派閥は信長の五男秀勝を養子とした。秀勝は天正十年三月に元服以降軍事指揮権も行使。命令で職封の「鉢植大名」にする権限をもった。未曾有の興味津々の物語が始まった。

（高尾山健康登山の会会長）

入院

日日心悄然
白頭臥院中
患者成信者
祈手術成功

厚木市　荒井　一雄

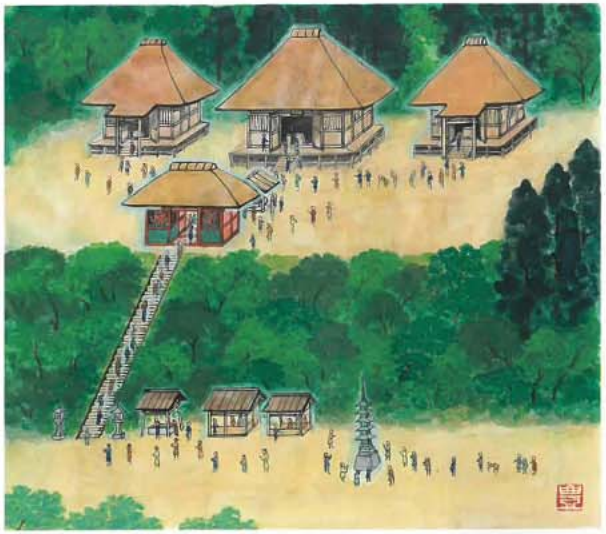
生まれしゆ
初の入院　手術まつ
心晴れやかなるやうになれ

日々心は悄然たり
（元気なくもの寂し）…
白髪頭は病院のベッドに臥す…
患者はいまそより一層熱心なる
信徒と成り、『手術成功』を
飯縄様・薬師様に
しっかりと祈らん…

高尾山物語 22

寛永の高尾山再興

絵・橋本豊治



爰に、新に法器を鋳て、以って典章を守る。華鯨月に吼へ、黄鶴霜に鳴く。豊嶺秋暮て、武陵夜長し。無明の眠りを覚し、旅客の装を促す。大檀力を致し、萬歳芳を伝う。

寛永古鐘銘文より『高尾山の歴史』外山徹　五十頁

小田原北条氏の滅亡以降、境内が荒廃し、苦難の時代を耐えてきた薬王院は十七世紀中頃、寛永期（一六二四～一六四四）の山主である、十世尭秀の時代に再興を果たすこととなりました。

現在大本堂の建つ一角には、古地図によるとかつて三つのお堂が並んでいたことが分かります。

中央の薬師堂、向かって左が護摩堂、右が大日堂です。薬師堂は明治時代に山麓の大光寺へと移築されましたが、護摩堂と大日堂はそれぞれ奥之院不動堂と大師堂として現在の位置に移築されており、今でもその姿を見ることができます。

同時期には、現在も残る「寛永古鐘」が鋳造され、その表面には、檀徒が一致協力して復興させたことが読み取れます。

追ったつもりで
追いやれぬもの
煩い悩み
諸煩悩

総本山智積院内局御一行 年賀に来山

去る一月十八日、真言宗智山派総本山智積院より、芙蓉良英宗務総長をはじめとし、馬場修任総務部長、高麗行真教学部長、笹沼弘憲教化部長、三神栄法法務部長、久保田剛士財務部長、近藤昌俊宗務出張所長の皆様が来山されました。

御一行は、到着後大本堂でご法楽をあげられ、山内僧侶・職員の出迎えを受け、菅谷執事長と当山書院・松の間にて新年のご挨拶を交わされ、しばし歓談の後に下山されました。

書院・松の間にて記念撮影する菅谷執事長と内局の皆様

おはなし散歩道

新月の夜

湯沢町　富樫あい子

天狗が休みに来るという幻の老杉は武州ののどかな峠にあった。

だが、天狗を見た者はひとりもいない。

峠は麓の村と町を繋ぐ一本しかない山道だ。

ある秋の頃、峠で奇妙なことが起こった。

旅人が、山賊に身ぐるみはぎ取られたとか、山中を歩き回わり意識をなくした人がいる。

また、妖怪に追いかけられ鬼火を見たとか、峠に化け物が出るという噂が広まった。

秋も深まった頃、道に迷った旅人が山から走ってきた。村人は何があったか聞けないくらい逃げ足が速かった。

その後で、体格のいい山伏が村人に尋ねた。

「峠越えは、この道か？」

「はい、峠は化け物が出るので誰も行きません。昨日も武者が行ったが、ふるえて戻って来ました。行ってはダメです！」

山伏を必死に止めたが無駄だった。山伏は、

「心して参ろう！」

と言い峠の入り口で経を唱え始めた。森の中に朗々と響く経に村人は顔を見合わせて驚いた。

空を仰ぐと黒い雨雲が垂れ込め大粒の雨が降り出した。山伏は動じないで唱え続けた。村人も一緒に祈り出す。すると空が割れるような雷が鳴り、首を絞められるような獣の鳴き声がする。その声に負けない声で経を唱え続けた。

次第に化け物たちの息絶える声が聞こえた。

「今行く！　皆も来い」

山伏は村人を引き連れて峠へと向かった。

峠に近づくと、皆は周囲を見わたした。唖然とした。

「幻の木、老杉が！」

村人が涙声で叫ぶ。無残にも枯れ果てていた。

常に青々と枝葉を付け堂々とそびえ立っていた老杉が無念だった。

山伏は老杉を両手でなで始めた。獣の苦しみ声はおさまっていた。

「これで終わりじゃ！」

山伏は枯れた幻の老杉に話しかけた。老杉は最後の枝葉をパサッと地面に落とすと語った。

『われは、今まで山の化け物（山賊や追いはぎ）と戦い、この峠を守って来たが、老いた今はもうその力がなくなった。われを切り倒せ……』

幻の老杉は、枝葉のない大木へと姿を変えた。

村人のすすり泣く声が峠を覆っていた。

「最後の枝葉はこの山伏が預かる。ありがとう」

山伏の「ありがとう」の声が静けさの戻った峠にこだました。幻の老杉は生気を失いまるで仏の姿に見えた。皆が木に合掌するとアッという間に山伏が消えた。

「あれ、あれ山伏が！」

探しても山伏の姿は見当たらない。その夜、村人は集まり相談した。『峠の心柱として、自分達で社を作り若木を植えて代々お守りしよう』と話しはまとまった。

新月に木を切ると決まった。新月に伐採した木は腐らない虫がつかない、長持ちすると言う。

新月の夜、村人が峠に向かうと「ヨイサーコラサ」と掛け声が聞こえる。村人はあわてて峠へと走り出した。峠に着くと、幻の老杉が切り倒されていた。道の先には峠を下る数十人の白装束の姿があった。

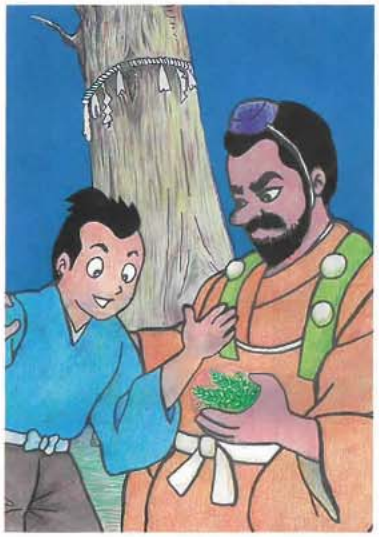
「あの姿は天狗様だ！高尾山参道も普請されたと聞いた。ありがたい」

村人が気付いたのだ。頭をさげた足元には、山伏が預かった最後の枝葉に新芽が出ていた。

村人は新芽を若木に育て峠に植え「心柱」として祀った。それ以来、峠で化け物や追いはぎは出なくなった。

天狗様も時々峠に現れるという噂じゃ。

（挿し絵・小出　茂）



柴燈大護摩供厳修
高尾山火渡り祭 開催のお知らせ

三月八日(日)午後一時より　於・山麓祈祷殿大広場

火渡り祭「なで木」の功徳

「なで木」とは御本尊様の大慈大悲の御手であります。

年齢・氏名を御記入の上、健康な方は益々壮健であるように、お身体に病の生じている方は、御本尊様を念じながら「なで木」でその患部を撫でさすり下さい。

高尾山火渡り祭において、柴燈大護摩供の護摩木として山伏により、火中に供されることで、身体健全・息災延命を祈念して御本尊様よりお加持を賜り、病魔を滅する御加護をいただきます。

なで木料　一座二百円

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方の御信徒や、参拝できない御信徒の皆様の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、「高尾山薬王院公式ホームページ」内の御護摩祈祷の御案内からインターネットにて、直接お申し込み頂くことが出来ますので、是非ご利用頂きますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先☎〇四二-六六一-一一一五
「郵送御護摩係」まで

高尾山火渡り祭
柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内
（三月八日　日曜日）

當山では毎年三月第二日曜日に高尾山祈祷殿大広場にて、高尾山に春を招く恒例行事として、高尾山修験道による火渡り祭が、高尾山麓火渡り本尊ご寶前において盛大に執り行われます。

火渡り祭とは、高尾山主大導師のもと、全国各地の霊山で修行を重ねた山伏が、一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈祷法要であります。

この勝行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて使用される、御本尊・飯縄大権現様の功徳を顕す御壇木のご志納を一本一万円にて募っております。

ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大いなるご信授を賜りますよう、謹んで御壇木のご志納をお願いを申し上げる次第でございます。

尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院境内に一年間掲示させて戴きます。御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒課までお問い合わせ下さい。

電話　〇四二-六六一-一一一五
大本山　高尾山　薬王院　信徒課

祈大願成就　身体健全
高尾　登

お知らせ

高尾山では、御壇木御志納の申し込みを、お電話・ファックス等で受付けております。

高尾山報の二月号に同封いたしました、郵便振替「払込取扱票」を利用してもお申し込み頂けますよう便宜を図りましたので、よろしくお願い申し上げます。

「払込取扱票」でお申し込みを頂く際に、願意（お願い事）が未記入の場合にご連絡がつかない場合、「身体健全」とさせて頂きます。

また、火渡り祭の時にお名前を読み上げますので、フリガナの記入もお願い致します。

尚、「払込取扱票」は、高尾山報助成金の振替にもご利用いただけます。

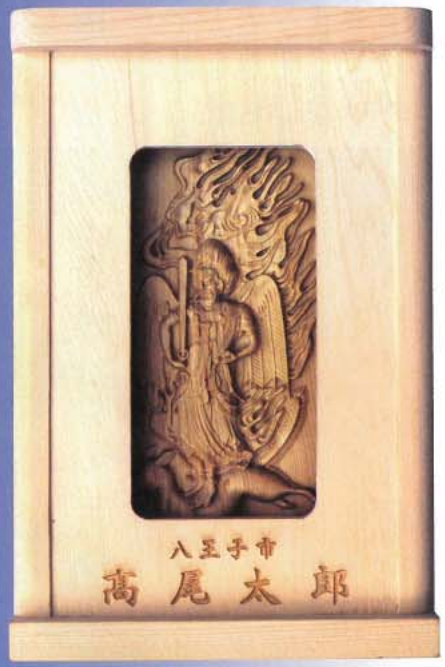
御本尊・飯縄大権現様との御縁を深める
大本堂内 結縁「内陣御納佛」奉安のご案内

高尾山では、御信徒様と高尾山御本尊・飯縄大権現様との益々の御縁が結ばれますように、大本堂内陣に御本尊様の御魂を宿した「内陣御納佛」の奉安を皆様にお勧め申し上げています。

お申し込みになりますと、御納佛との尊い結縁のしるしとしてご芳名を刻み、大本堂内陣壁面に奉安され、幾久しくご繁栄を祈念するものであります。

また、御納佛が壁面に満たされますと、その都度、内陣格子奥に移し大切に安置されるものであります。

御納佛冥加料　一体　五萬円



高さ13.5センチ　横幅9センチ

神徳報謝百味飲食供 御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。

尚、法要終了後に大本堂にて百味の御札を授与致します。

また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

毎月二十一日　午前九時（於大本堂）
御志納金　一口　三千円以上

大般若経を守護する十六善神の図

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

高崎市　安中　モト子
東村山市　池ヶ谷　益生
福生市　関　道雄
新潟市　寺門　義昌
府中市　井上　瑞穂
松戸市　榎本　光
秩父郡　神林　一夫
高崎市　武部　攻
横浜市　橘　禮子
八王子市　角田　光一郎
日野市　濵田　安代
白石市　八島　せい子
西東京市　宮野入しづ子
前橋市　兼井　敦
入間市　垣沼　ひろみ
港区　志田　隆猛
中野区　河野　雅子
川越市　近藤　良子
太田市　高野　さき子
海老名市　松政　伸
八王子市　高木　孝子
〃　中島　久江
小千谷市　成　就院
八王子市　峯尾　正彦
〃　吉村　隆一
秩父市　上原　幸江
伊勢原市　徳田　宏晴
八王子市　佐々木　晋介
志木市　増山　進
中野　茂宏
所沢市　神元　誠
相模原市　佐久間　宣行
桐生市　櫻井　正明
鎌倉市　米山　公武
高崎市　落田　次雄
比企郡　小久保　雅代
八王子市　土方　良二
さいたま市　大澤　英子
太田市　菅田　石太郎
八王子市　降矢　久子
〃　町田　良樹
練馬区　神山　静子
武蔵野市　後藤　明夫
前橋市　佐藤　源韶
北本市　清水　武
八王子市　秋山　誠
武蔵村山市　内野　順子
練馬区　飯畑　正男
横浜市　小黒　美智子
足立区　藤本　信一
港区　手塚　昭子
板橋区　真弓
江戸川区　佐藤　輝元
足利市　清水　松代
草加市　峯尾　好生
昭島市　坂本　隆
所沢市　金沢　利夫
古河市　横内　忠雄
武蔵野市　榎本　敏和
八王子市　小宮　昇
板橋区　宍戸　光男
荒川区　小川　享宏
八王子市　五味　三榮
〃　櫻田　義弘
西東京市　下田　トミ子
新座市　彰山　粧麗
深谷市　加藤　隆
新座市　高橋　久子
足立区　中山　恵司
狛江市　熊澤　利久
みどり市　荻原　重徳
新宿区　大橋　輝子
小平市　福王　茂雄
八王子市　鈴木　良子
本庄市　岩崎　セイ子
伊勢崎市　阿部　重雄
南アルプス市　三枝　秀武
八王子市　苅部　栄寿
甲府市　丸山　福栄
松本市　後藤　和一郎
熊谷市　持田　光生
北区　大満寺
世田谷区　坂本　ルイ子
八王子市　鶴田　唯昭
東大阪市　安宅　達利
川崎市　天沼　寛文
豊田市　山中　裕貴
町田市　坂口　安宏
藤岡市　吉村　幸一
相模原市　髙橋　武
東村山市　福島　光子
町田市　松本　幸子
八王子市　川村　暁信
加須市　塩崎　君子
秩父市　飯島　孝夫
鴻巣市　杉山　邦司
調布市　星野　康太
羽生市　鹿野　ツネ子
鶴ヶ島市　梶田　石雄
八王子市　石田　博司
多摩市　佐々布　景孝
八王子市　小浦　泰晴
相模原市　原　武
宮城県　薫風の家
鴻巣市　㈱太章興産
八王子市　齋藤　実
川崎市　松井　昭三
立川市　石田　智恵子
八王子市　廣瀬　美二
杉並区　(宗)医王寺　吉彦
相模原市　石井　幸子
甲州市　植野　吉雄
三鷹市　長田　敏雄
太田市　小嶋　ヨシ
府中市　菊池　良二
墨田区　片男波　幸代
日野市　峯尾　チヱ
町田市　山内　育男
飯能市　大久保　惣一
八王子市　田所　義光
市原市　本吉　芳和
八王子市　倉石　和子
板橋区　河西　珠美
八王子市　山本　利江
〃　古田　勝
北区　山口
所沢市　北田　光一
八王子市　峯尾　晴夫
三鷹市　三鷹明心講
秩父郡　今井参拝団
比企郡　小鷹　健一
藤沢市　高山　ひら子
八王子市　平塚　紀美子
大田区　金子　毅
八王子市　齋藤　善法
練馬区　水島　磐男
熊谷市　橋本　房子
八王子市　内田　久之助
〃　秋間　薫
〃　中田　律子
深谷市　武井　悦子
小平市　青木　勝
飯能市　土屋　秀子
下野市　松島　智
八王子市　佐藤　光
本庄市　山田　栄夫
八王子市　村木　廣美
船橋市　小淵　修二
八王子市　塚本　道男
羽生市　米川　雅雄
八王子市　小林　恵己子
〃　金子　喜美子
相模原市　遠藤　恵子
高崎市　永田　滋
茅野市　原　光男
相模原市　野左根佐智子
坂戸市　大塚　一男
高尾山健康登山者一同

登山だより

■三月行事日程■

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)

三日、十五日、二十七日
弁天様御縁日

三日、十六日
御詠歌勉強会
(十時山麓不動院)

八日
仏舎利詣り(仏舎利塔)

二十八日
月例写経会
(十三時山麓不動院)
奥之院開扉供養
(十時奥之院)

二十九日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)

三月八日
高尾山火渡り祭
午後一時
山麓祈祷殿大広場

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)
○御本尊様の日々の御加護に感謝し、百味のご供物を捧げて供養する法要です。

毎日のお護摩奉修時間
(11月1日～4月14日まで)

午前6時00分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山の昆虫 124

オツネントンボ

大半の昆虫は長く厳しい冬を幼虫で過ごすのが通例ですが、クワガタやオサムシ等の甲虫やタテハチョウの一部は成虫越冬することが知られています。

そんな中でトンボの中にも越冬する数少ない種がいて、それはオツネントンボです。

イトトンボの仲間で「越年トンボ」と呼ばれるこのトンボは淡い褐色を帯びた体色で、河川や池の周辺の水草が多い場所に生息します。本種は一年中体色が変ることがなく、この地味な色合いは枯れ葉に見え、保護色の意味合いがあるのかも知れません。

高尾山の麓に流れる小川はトンボ天国で、大型で稀少なヤンマ類が多いですが、本種のようなイトトンボたちも数多く見られます。

本種によく似た種のホソミオツネントンボは比べるとやや小型で、オツネンの方は止まった時に前翅と後翅がややずれるのに対し、ホソミの方は完全に重なる点で異なり、体色も鮮やかな青味を帯びますので見分けは容易ですが、冬季は褐色の枯れ葉仕様になります。

見た目が華奢なオツネントンボが意外に逞しく、成虫のまま野外の厳しい寒さに耐え冬を乗り切ることに感動を覚えます。

(文 松島　孝　撮影 上村　雅昭)

高尾山報助成金 御志納のお願い

当山では、大護摩修行や星祭り等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報を送っております。

引き続いてご愛読されますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷秀文
編集人 渋谷秀芳
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp